

# 視聴覚アーキビストから見た カンボジアの映画保存

## 『12人姉妹』と『ノロドム・シハヌーク作品』の事例

鈴木 伸和



### はじめに

筆者は2014年9月から2015年8月まで、文化庁の新進芸術家海外研修生として、プノンペンにあるボパナ視聴覚リソースセンター（以下、ボパナセンター）で視聴覚アーキビストとして働いていた。なぜカンボジアで視聴覚アーキビストとして働くことを選んだのかというと、三つの理由があった。一つ目は、カンボジア政府が多くの映画フィルムを所蔵しているにもかかわらず、フィルムを保存するための専門家がカンボジア国内にいないため、調査・保存が適切に行われていなかったからである。二つ目は、ボパナセンターと協働することで、カンボジア政府のフィルムコレクションにアクセスし、調査・保存活動を行うことが可能になったためである。三つ目は、フィルム保存の専門家が国内にいないカンボジアを一つの事例として、そのような国でどのように映画保存活動を行い、継続させるかについて学ぶためである。これらの経験を元にして、本稿はカンボジアの映画保存について考察する。さらに『12人姉妹』(1968) (12 sisters story) とノロドム・シハヌーク前国王の映画作品を、映画保存の事例として報告する。

## 1. カンボジアの映画保存

### 1.1. 映画史の先行研究

カンボジア映画史の研究は、筆者が知る限り、2001年にLy DaravuthとIngrid Muanが発表した文献<sup>1)</sup>、<sup>2)</sup>と、2009年にKirstin Willeが発表した文献<sup>3)</sup>以外に

- 1) Ly Daravuth and Ingrid Muan. 2001a. *Cultures of Independence: An introduction to Cambodian Arts and Culture in the 1950s and 1960s*: reyum.
- 2) Ingrid Muan and Ly Daravuth. 2001b “CAMBODIA, A Survey of Film in Cambodia” in *Film in South East Asia: Views from the Region*, ed. David Hanan: SEAPAVAA[South East Asia-Pacific Audio Visual Archive Association], the Vietnam Film Institute and the National Screen and Sound Archive of Australia, 2001), p93-106.
- 3) Kirstin Will. 2009. *Film Production in Cambodia*: Thüringisch-Kambodschanischen Gesellschaft e.V.

主要なものはない。現在までに公表されているカンボジア映画史に関する情報は、その内の [Daravuth and Muan 2001a]からの引用が多く、独自の調査をしているのは少数である。なぜなら、この一冊のみがプノンペン市内の本屋で簡単に入手できるためである。

ダヴィ・チュウが『ゴールデン・スランパーズ』(2011)の製作のために行った調査を契機として、2010年に発行された冊子<sup>4)</sup>や、2013年にカンボジア国際映画遺産フェスティバルが発行した冊子<sup>5)</sup>にカンボジア映画史の言及もあるが、これらは情報源の記載が少なく、記述された内容が正確な情報が確認することが困難な部分もある。

こうした不確かな情報はウェブサイト上にも多い。それでも、『ゴールデン・スランパーズ』の上映後、カンボジア映画黄金時代と呼ばれるいわゆる60年代から75年までの国産映画と、その時代に活躍した映画関係者にカンボジア国内でも注目が集まるようになり、インタビュー等が行われるようになってきたことは注目すべきである<sup>6)</sup>。こうしたオーラルヒストリーを元にしてカンボジア映画黄金時代が見直されてきているが、未だにカンボジア映画史の専門家は非常に少ないのが実情である。

### 1.2. 残存しているカンボジア映画

1975年までにカンボジアで何本の国産映画が製作されたのか正確には分からない。ダヴィ・チュウの調査によって、Huy Vathana氏らが当時見た映画を元にして作成したカンボジア映画のデータベースでは、307作品の映画題名がリスト化されている。このリストは個人の記憶によって2009年に作成してから更新されておらず、間違えている部分もあると思われるた

- 4) Tilman Baumgartel. 2010. *KON, The Cinema of Cambodia*: Department of Media and Communication, Royal University of Phnom Penh.
- 5) Memory! International Film Heritage Festival. 2013.
- 6) Voice of America, Cambodia. April 16, 1015. ティ・リム・クン (Tea Lim Kun) インタビュー .

表1 1975年以前のカンボジア映画で視聴可能な作品

	題名	別題名	製作年	監督
1	Mother's heart	Chet Mday	1963	Yvon Hem
2	Veul Vinh Na Bang		1966	Tea Lim Kun
3	Painfulness	Kou Oy Chok Chheam	1966	?
4	Dara Vichhay	Malay Soriya	1967	Or Sa Nga
5	Preah Chan Korup		1967	?
6	Sovannahong		1967	Yvon Hem
7	White Lotus	Neang Pov Chhuok Sor	1967	Tea Lim Kun
8	The Prince Preah Thinavong	Preah Thinavong	1967	Ly Va
9	Chan Kreufa		1967	?
10	Achey Neang Krot		1968	Tea Lim Kun
11	Tep Sodachan		1968	Lay Nguon Heng
12	Inav Bosba		1968	Yvon Hem
13	Abul Kasem		1969	Yvon Hem
14	Chan Kreufa		1969	Biv Chhay Leang
15	Ratanavong	Sisovan Chanbopha	1969	Biv Chhay Leang
16	Thavary Meas Bang		1969	Uong Kan thun
17	Muoy Meun Alay		1970	Uong Kan thun
18	Sovanpanhcha		1970	Yvon Hem
19	Bone of the father's hand		1970	So Man Chhiv
20	Khmers after angkor		1971	Ly Bun Yim
21	Pacha Por Tevy		1971	Chhea Nuk
22	My Karma		1971	?
23	The time to cry		1972	Uong Kan thook
24	Roub Eth Phoib	Chivith Aphoib	1973	Ros Proeung
25	The Snake Girl	Neang Preay Sark Pours	1973	Chin Wan
26	True Love		1973	Yvon Hem
27	The Crocodile Men		1974	Houy King
28	Pos Kéng_Korng		1974	Tea Lim Kun
29	Break My Heart		1975	Tan Bun Leak

※ボバナセンターのデータベース情報をそのまま参照したものであり、題名や製作年には不確かな点がある。特に製作年は参考文献によって異なることが多い。

め、現在、一般には公開されていない。その調査を元に、ダヴィ・チュウは『ゴールデン・スランパーズ』の中で「300作品以上の映画が製作された」と表現するに留めている。筆者がダヴィ・チュウからこのリストを見せてもらった限りでは、主演俳優、監督、製作プロダクション、製作年代も題名とともにリスト化されおり、そこまで適切にまとめた情報であれば、多少の加減はあっても大きな間違いは無いと考えている。

残存しているカンボジア映画について、表1はボバナセンター内で一般公開されているデータベースから、1975年以前のカンボジア映画で、映像が視聴可能な作品のみを2015年に筆者がリスト化したものである。

表1のカンボジア映画は、1980~90年代に、誰かがどこかで映画フィルムからVCDもしくはVHSに複製したものと思われ、その複製物をデジタル化したデジタルデータのみをボバナセンターがサーバーに保管している。それらのデータは低解像度であり、かつ当時の上映スクリーンとは異なる画郭でトリミングされている作品も多い。さらにセリフや音楽が編集されてオリジナル音声が残っていない作品もある。

リー・ブン・ジム監督は、全3作品の映画フィルムを個人的に保管しており、表1の1作品(No.20)の他に2作品を所有している。その2作品は『Sobbseth』(1965)、『Puthisen Neang Kongrey』(12 sisters story)(1968)であり、リー監督の許可を得て筆者はその映画フィルムを直接確認している。さらにティ・リム・クン監督は全7作品の映画フィルムを個人的に保管していると公言しており<sup>7)</sup>、表1の4作品(No.2, 7, 10, 28)の他に3作品の映画フィルムも所持していると思われる。ダヴィ・チュウによれば、表1の4作品の他に『Tek Phnék Neang kor』(1966)、『Neang Champa Thong』(1969)、『Bopha Angkor』(1972)の3作品もボバナセンターに映像データを渡したそうであるが、筆者はデータベース内でその3作品を見つけることはできなかった。

データベースにはデータが壊れたものや非公開作品もある。これらを全て合わせると、確認できるだけで37作品が残存しており、誰でもボバナセンターで29作品にアクセスすることができると言える(違法かどうかはここでは問わない)。もちろん、表1の他にもカンボジア映画黄金時代の作品を、様々な所有者がいろいろなフォーマットで保管しているのを筆者は見ることがある。しかし、それらは個人的かつ違法な場合が強く、誰でもアクセスし、視聴することができない作品であるためここでは触れない。

### 1.3. カンボジア映画はどのように失われたか

「クメール・ルージュが政権を握るとただちにそのほとんどが処分され<sup>8)</sup>とあるように、「1975年以前のカンボジア映画の約90%がクメール・ルージュによって破棄または焼却された」という情報が日本の新聞や雑誌、ウェブサイト等にも書かれるようになった。しかし、カンボジアにある映画フィルムを調査した一個人として、これらの情報に対する疑問をここに提示したい。なぜなら、いかにして映画が失われるか、その原因がきちんと理解されていないために、現在でもカンボジア映画が失われ続けているからである。この点については[鈴木 2016a][鈴木 2016b]に書いたが、重要であるため書き添える。

7) 第25回東京国際映画祭(2012年10月30日)で上映された『天女伝説プー・チュク・ソー』の後に行われたティ・リム・クン監督のQ&A(<http://2012.tiff-jp.net/news/ja/?p=14682>)(2017年12月6日閲覧)。

8) 東京国際映画祭(2012)「ゴールデン・スランパーズ」作品紹介(<http://2012.tiff-jp.net/ja/lineup/works.php?id=119>)(2017年12月6日閲覧)。

1.2.で述べたように、カンボジア映画黄金時代の映画は「300作品以上が製作され、約30作品が何らかの形で視聴可能」であると言うことができる。では、他の270作品の映画フィルムは、本当にクメール・ルージュによって破棄や焼却が行われたのであろうか。2015年、リー・ブン・ジム監督に筆者がインタビューした限りでは、彼が製作・監督した映画作品のオリジナルネガフィルムは、カンボジア国内ではなく、保管していたフランスと香港の現像所で廃棄されたそうである。上映用ポジプリントについては、国内で映画を上映する場合、オリジナルネガフィルムから10本程度のプリントを複製して、国内で配給・上映していたそうである<sup>9)</sup>。

ここで映画を物として考えてみると、大雑把に換算して、300作品のカンボジア映画というのは3,000本の上映用プリントのことを指し、1本の上映用プリントというのは、上映時間2時間の作品だと、2,000フィートの35ミリフィルムに換算して約6缶になる(1缶が約2~3kg)。つまり、300作品のカンボジア映画というのは、カンボジア国内外の現像所等に保管されたオリジナルネガフィルム1,800缶(4.5t)と、カンボジア国内の各配給会社、映画館等に散らばった上映用ポジプリント18,000缶(45t)の映画フィルム缶を指すのである。

これらカンボジア国内外に分散された、重たく、燃えにくいスチール缶に入った映画フィルムを、クメール・ルージュはどのように収集、破棄、焼却したのであろうか。映画フィルムに特化した徹底的な破壊工作と、人材と爆薬と、さらにカンボジア国外での地道な活動をしなければ、わずか4~5年で国産映画のオリジナルネガフィルムと上映用プリントの約9割を処分することはほぼ不可能である。

多くのカンボジア映画が失われた原因は様々な理由があり、クメール・ルージュがその原因の一つであることは疑われないが、全てを押しつけるのは非合理的である。例えば、1990年代のカンボジア映画が何作品製作され、現在、何作品にアクセスできるのかはまだ分からないが、カンボジア国内に保存施設がないため、現在9割以上が見られなくなっているとしても不

9) オリジナルネガフィルムとは、カメラで撮影した映画フィルムのことを指す。リー監督によれば、このネガフィルムからラッシュプリントという簡易的なポジフィルムを複製し、編集を行ったそうである。編集が終了したら、編集されたラッシュプリントと同じようにオリジナルネガフィルムを編集し、そのオリジナルネガフィルムから劇場で上映するための上映用プリントを複製することが一般的である。

思議ではない。つまり、長い内戦と、カンボジア国内外の映画保存に対する無理解と無関心によって、カンボジア映画が失われた、もしくは失われていると言えるのではないか。

さらに付け加えたいことは、なぜクメール・ルージュが映画フィルムを処分したという憶測が流布するのか、という点である。理由は二つあると考えられ、一つはクメール・ルージュによる文化財の破壊をニュースにすることで、人々の関心を集められるというメディア側の思惑であり、もう一つはクメール・ルージュにより破壊されたということにすれば、映画関連の資金が得やすくなるという組織側の思惑である。そのため、今後もこのような憶測は無くならないだろうと思われる。

#### 1.4. カンボジアの映画保存活動

カンボジアはフランスの保護領(もしくは植民地)であったため、20世紀初頭からフランス人らによってカンボジア国内が映画フィルムで撮影され、それらの映画フィルムはフランス国内に今でも保存されている。カンボジア人自らが最初に映画フィルムで国内を撮影したと言われているのは、1940年代のノロドム・シハヌークと言われており、彼が個人的に映画を製作して王宮内で上映したそうである。しかし、この映画フィルムは残念ながら残っていないようである。

1950年代からカンボジア人による映画製作が行われ始め、1975年までのカンボジア映画黄金時代の映画フィルムが、ポル・ポト政権時代(1975~1979)にどのような扱いを受けたのかはよく分かっていない。1.3.で述べた通り、多くの映画フィルムは徹底的に破壊された訳ではなく、単純に無視され放置されていたに過ぎないと筆者は考えている。

ポル・ポト政権崩壊後、国内に残っていた映画フィルムがヘン・サムリン政権下でどのように収集されたのかを含め、1980年代の映画フィルムの状況もほとんど知られていない。筆者がボパナセンター職員に聞いた限りでは、国内に残っていた映画フィルムは、1979年に政府が街で収集し、プノンペンにある元映画撮影スタジオで保管したということである。

2014年に筆者がその保管庫内を見た限りでは、カンボジアに関する映画フィルムが1,000~2,000缶と、80年代にカンボジア国内で上映していた外国映画と思われる映画フィルム1万缶以上が置かれていた。カンボジアに関する映画フィルムの缶の中には、1980年

表2 『12人姉妹』カンボジア語版とタイ語版の比較

	カンボジア語版	タイ語版
フォーマット	ビデオテープ (DVCAM)	35ミリフィルム
上映時間	116分26秒	120分12秒
画郭	1:1.82(未規格化)	1:2.35(シネマスコープ)
保管場所	監督所有	ベルリン映画祭事務局
作成年	不明	1983年製造のコダック製フィルム
音声	オリジナル音声と後年に制作した音声が入混在している可能性が高い。高音域が割れている。	主題歌などの歌を除いて、カンボジア語版と音声異なる。音声は割れていない。
色彩	コントラストが全体的に薄い	ほぼ正常である
画質	SD (720x480)	35ミリフィルム

代にその映画フィルムの内容を書き出したと思われるメモが入っているものもあった。そのことから、80年代に国内の映画フィルムの調査を政府が行った可能性もあるが、当時の状況からすると、ポル・ポト政権時代に撮影された映画フィルムを探しただけではないかと考えられる。

1980年代～90年代に、カンボジア映画黄金時代の映画を複製したVCD、VHSが一部の人の間で見られるようになったが、それでも熱心な映画保存活動は行われておらず、複製後に、元の映画フィルムは廃棄されたようである。2006年にボパナセンターが設立された時も、主たる目的はカンボジアとポル・ポトに関する映像データを国外から収集し公開することであり、国内の調査はクメール・ルージュに関する映像に集中していた。

2009年以降、ダヴィ・チュウらによってカンボジア映画黄金時代の映画作品の調査が始まり、いくつかの映像データは、違法であるかどうかはさておき、ボパナセンターに譲渡され、公開されている。現在、カンボジア政府が所蔵している映画フィルムは、クメール・ルージュ関係以外の調査がほとんど進んでおらず、適切な保存処置もされないまま劣化し続けているのが現状である。

## 2. 「12人姉妹」の事例

### 2.1. カンボジア語版とタイ語版の比較

2016年2月、筆者は東京の恵比寿映像祭で「12人姉妹」(タイ語版)の上映企画を担当した。さらに2017年6月には混成アジア映画研究会と国際交流基金アジアセンターの主催による「12人姉妹」(カンボジア語版)の上映にも携わった。タイ語版の上映については[鈴木 2016b]に書いたため、ここでは二つのバージョンを映画技術の面から比較考察する。実際に残っている「物」はタイ語版の35ミリフィルムとカンボジア語

版のビデオテープである。それらの比較は表2となる。

これまで二つのバージョンは上映時間が異なると言われており、比較すると実際にその通りであった。しかし、カンボジア語版はデータ容量を軽くさせるために約1秒につき1フレームを間引いていることが判明した<sup>10)</sup>。そのため上映時間は3分46秒の差となるが、カンボジア語版はタイ語版のどこかのシーンが丸ごと削除されたために短くなっている訳ではない。

画郭の違いは大きな問題であり、タイ語版はシネマスコープと呼ばれる横長の画面(1:2.35)である。しかし、カンボジア語版は左右が作為的に削られ、1:1.82という特殊な画郭となっている。つまり、カンボジア語版はタイ語版に比べて左右の映像が約24%失われているということである。どうしてカンボジア語版の左右の映像が削られているのかというと、正確な理由は不明だが、ブラウン管テレビのサイズ(4:3)で横長の映像を見る場合、上下に黒いラインが入ると実際の映像が小さくなりすぎるため、左右を削って横長の映像をなるべく正方形にし、大きく見せるためであったと思われる。当時、このような編集は比較的普通に行われていたことであった。

音声は不明な点が多い。重要な点は、カンボジア語版音声は、1968年公開当時のオリジナル音源でない可能性が高いということである。なぜなら、制作当時の1967年にあまり使われていなかったカンボジア語の単語が台詞に入っているためである<sup>11)</sup>。この点については推測の域を出ないため確証はない。ダヴィ・チュウがリー監督にインタビューをしたところ、監督はカンボジア語版のビデオテープの音声を、後年に編集したかどうか覚えていないという。さらに音声について

10) 通常、映画フィルムは1秒間24フレームの静止画で記録される。ビデオ映像は1秒間25フレームもしくは30フレームの静止画で記録される。

11) 2017年6月の上映準備で岡田知子氏がこの点を指摘している。また、ダヴィ・チュウはオリジナル音声と後年になって制作した音声が入混在していると確信している。

は、カンボジア語版は高音域が割れており、1968年当時の音声とは思われない音質である。これはフィルムからビデオテープに複製した時、もしくはそれ以降に何らかの編集が行われた際に、音声に不具合が出たとされる。

「12人姉妹」(カンボジア語版)のフィルムからビデオテープへの複製(テレシネ)は、その技術が広く普及した1980年代以降から、リー監督がカンボジアに戻り、上映を行い始めた1993年頃までの間に行われたと考えられる。つまり、「12人姉妹」(カンボジア語、オリジナル音声版)の映画フィルムは、1979年以降も残存していたが、クメール・ルージュとは関係なく、ポル・ポト政権崩壊以降に廃棄されたということを意味している。

## 2.2. 映画の真正性とは

2017年6月にカンボジア語版の上映を東京で行った時は、監督が所有しているカンボジア語版のビデオテープ(DVCAM)をそのまま上映せず、タイ語版の画とカンボジア語版の音を組み合わせる作業を行った。なぜこのような作業をしたのかと言うと、表2でも分かるように、カンボジア語版の画はタイ語版に比べて分数が短く、色のコントラストが悪く、また左右の映像が失われているため、劇場公開当時のオリジナルとかけ離れたバージョンを上映することは適切ではないと筆者が判断したからである。画と音の組み合わせ作業は、2016年にリー監督自らが行っており、そのデジタルデータに日本語字幕を挿入して上映を行った。

過去の映画作品を公開当時の上映形態に可能な限り近づける作業というのは、その映画を適切に評価、研究するためにも必要なことである。例えば、ボパナセンターが所蔵しているカンボジア映画黄金時代の作品リスト(表1)の中にも、後年になって音声が変わっていたり、映像が編集されていたり、左右の画が削られている作品もある。「12人姉妹」は運良く映画フィルムでも残っているため、ビデオテープの映像と比較検討できるが、もしビデオテープだけで残存している映画作品であれば、当時の映画として正しく評価することが難しくなるだろう。なぜなら、変更されていても分からないことが多いからである。

もちろん、映画フィルムが残っていたとしても変更されていない可能性はゼロではない。しかし、映画フィルムの改変よりも、ビデオテープやデジタルデータの改変の方が圧倒的に簡単に行うことができる。カ

ンボジア映画黄金時代の作品は約1割が残存していると言われるが、果たしてどれだけの映画作品が、公開当時のまま生き残っていると言えるであろうか。『12人姉妹』は、映画の真正性について改めて考えさせてくれる素材であると言える。

## 3. ノロドム・シハヌーク作品の事例

### 3.1. ノロドム・シハヌーク作品はどこにあるのか

ノロドム・シハヌークの映画に関する情報は、Eliza Romey<sup>12)</sup>が発表した文献が詳しい。しかし、ノロドム・シハヌークが映画製作に携わった全映画のフィルモグラフィは、どの文献でも筆者は見ることがない。そこで、彼の映画作品の所在を特定したリストを、2015年に筆者が作成した。このリスト作成に関する調査方法は[鈴木 2016b]に詳しい。

表3は、ボパナセンターのデータベースと、オーストラリアのモナシュ大学図書館で保管しているノロドム・シハヌーク関連資料を調査して組み合わせたりリストである。視聴できる作品に限っては全て視聴し、彼の名前が製作、監督、脚本、音楽のいずれかにクレジットされていることを確認済みである。ただし、彼が本当に製作に携わった作品かどうかの詳細な調査はまだ行っていない。例えば、映画内に文字情報が一切無い作品や、再生ができないDVD-Rディスクもあるため、さらなる調査が必要である。

さらに、プノンベンのカンボジア国立公文書館には、ノロドム・シハヌーク作品として登録されているが、表3のリストに無い題名の作品がVHSで残っていることを2015年に確認している。しかし、そのビデオテープを再生して内容確認までしていないため、表3には入れていない。表3は彼のフィルモグラフィを作成するための予備調査としてここに公表したものであり、今後の調査によって間違いや追加の作品もあるだろう。もし新しい情報があれば、フランス国立映画センター、ボパナセンター、モナシュ大学図書館、さらにカンボジア政府とも連携して情報共有されることをお願いしたい。

12) Eliza Romey. "King, Artist, Film-maker : The Films of Norodom Sihanouk" in *Film in South East Asia: Views from the Region*, ed. David Hanan (SEAPAVAA[South East Asia-Pacific Audio Visual Archive Association], the Vietnam Film Institute and the National Screen and Sound Archive of Australia, 2001), p107-118.

表3 ノロドム・シハヌーク映画作品の製作年と所在

	題名	製作年	フランス国立映画センター	ボパナセンター	モナシユ大学図書館
1	Atlantide	1940年代?			
2	Double Crime on the Maginot Line	1940年代?			
3	Tazan among the Kuoy	1940年代?			
5	La femme cambodgienne à l'heure du Sangkum	1960	有り (映画フィルム)	有り (24'13")	
6	Kampuchea 1965	1965?		有り (56'06")	
4	La danse en pays khmer	1965?			
7	Apsara	1966		有り (2h10'30")	
8	LA FORÊT ENCHANTÉE	1966	有り (映画フィルム)	有り (1h40'46")	
9	Prachea Komar	1966	有り (映画フィルム)	有り (1h02'34")	
10	La visite d'état du général de Gaulle au Royaume du Cambodge	1966	有り (映画フィルム)	有り (27'33")	
11	Preah Vihear	1966?			有り(写真プリント66枚のみ)
12	Cortège royal	1967	有り (映画フィルム)	有り (24'00")	
13	Shadow on Angkor	1967		有り (34'54")	
14	Ombre sur Angkor	1967	有り (映画フィルム)	有り (1h45'59")	
15	La Joie de vivre	1968	有り (映画フィルム)	有り (1h05'41")	
16	Crépuscule	1968	有り (映画フィルム)	有り (1h09'45")	
17	Rose de Bokor	1969	有り (映画フィルム)	有り (1h34'30")	
18	Phedre Khmara (製作中止)	1968~1970			有り (脚本)
19	Tragique destin	1969		有り (1h06'54")	
20	La Cité mystérieuse	1988			有り (脚本) (写真)
21	LA COMTESSE DE NOKOROM	1989			有り (脚本) (写真)
22	Adieu mon amour!	1989			有り (VHS) (1h40'00")
23	Mondulkiri	1990			有り (脚本)
24	Je ne te reverrai plus, ô mon bien-aimé Kampuchea!	1991		有り (1h02'12")	
25	Le Phare qui eclaire notre Vie	1991			有り (脚本)
26	Mon village au coucher du soleil	1992	有り (映画フィルム)	有り (1h03'25")	
27	Notre mariage au mont baiktou	1992			有り (脚本)
28	La fantôme de ma femme bien-aimée	1993		有り (41'03")	
29	Fatalite	1993			有り (脚本)
30	Un cress sauveteur de femmes paupers	1993			有り (脚本)
31	CHAMPA DE BATTAMBANG	1993or1994?			有り (脚本)
32	Un paysan et une paysanne en détresse (KEM and NIT)	1994		有り (1h16'12")	
33	REVOIR ANGKOR ...ET MOURIR	1994or1993?			有り (VHS) (1h22'00")
34	BOUDDHA DHAMMA SANGKHA LE SEUL REFUGE	1995		有り (46'39")	
35	Avatars old gentleman	1995		有り (1h05'17")	
36	UNE AMBITION REDUITE EN CENDERS	1995		有り (44'18")	
37	Les derniers jours du colonel Savath	1995		有り (34'57")	
38	FLEUR DU VIETNAM	1995			有り (脚本)
39	LA PAGODE DU BOUDDHA D'EMERAUDE à Phnom-Penh	1995			有り (VHS) (24'46")
40	HERITIER D' UN SECESSIONISTE VAINCU	1996or1992?			有り (VHS) (26'23")
41	UN APOTRE DE LA NON-VIOLENCE	1996			有り (VHS) (52'15")
42	Mari et femme dans une vie antérieure	1998		有り (34'10")	
43	Le Seigneur bouddha a pitié de nous	1998		有り (25'23")	
44	Le grand assassinat	1998		有り (1h31'20")	
45	J' ATTENDRAI...	1998			有り (DVD) (脚本) (写真)
46	JE PENSE TOUJOURS A TOI	1998			有り (脚本)
47	LE JARDINS DU PALAIS ROYAL DE PHNOM PENH	1998			有り (VHS) (09'42")
48	Le choix du coeur et de la raison	1999		有り (38'39")	
49	LOTUS DU BOUDDHA	1999		有り (28'44")	
50	Le Cid Khmer	2005		有り (1h02'45")	
51	Lon Nol Lon Non Lonliens	2005		有り (22'44")	
52	Mekha et Akha" and "Tu as use niece. J' ai un neveu.	2005			有り (DVD) (脚本)
53	La Chatelaine de Banareath	2005			有り (DVD) (脚本)
54	Aurore	2005			有り (DVD) (脚本)
55	RELIGION & AMOUR	2005			有り (DVD) (脚本)
56	LE LAC DU BONHEUR	2005			有り (DVD) (脚本)
57	Rose de Phnom Penh	2005			有り (DVD)
58	Une Malheureuse vie d' amoureuse	2006		有り (18'06")	
59	Arsina	2006		有り (22'14")	
60	Nokor Chas	2006		有り (29'45")	

次ページに続く

	題名	製作年	フランス国立映画センター	ボバナセンター	モナシユ大学図書館
61	Un Chate au milieu de la foret	2006		有り (44'40")	
62	Commandeur de l' ordre royal de koh daung	2006		有り (23'18")	
63	Qui n'a pas de maitresse?	2006		有り (12'46")	
64	Flamary & Atsouka	2006		有り (09'43")	
65	Renaitre	2006			有り (DVD) (脚本)
66	Pour Notre Roi	2006			有り (DVD) (脚本)
67	AVOIR 4 EPOUSES, CE N' EST PAS SI GAI QUE CA	2006			有り (DVD) (脚本)
68	UNE MALHEUREUSE VIE D' AMOUREUSE	2006			有り (DVD) (脚本)
69	RUY BLAS KHMER	2006			有り (DVD) (脚本)
70	L' attachement singulier d' use Pucelle	2006			有り (DVD) (脚本)
71	Bérénice khmére loeu	2007		有り (22'28")	
72	Neak Moneang Armance Chantrea	2007		有り (14'14")	
73	Koh Antay	2007		有り (24'25")	
74	Excuse moi, Madome, je suis HO MO	2007		有り (20'40")	
75	Ironie	2007		有り (10'12")	
76	Phnom Koulèn	2007		有り (19'04")	
77	Adieu, Bokor	2007		有り (12'38")	
78	Nouvel An	2007		有り (15'27")	
79	Neak Angk Ksatrei Audone & Neak Moneang Mahene	2007			有り (DVD) (脚本)
80	Basasethy	2007			有り (DVD) (脚本)
81	Arbres, Fleurs, Batiments royaux	2007			有り (DVD)
82	Passion	2008		有り (11'37")	
83	Ne vous moquez pas de mon amour!	2008		有り (28'50")	
84	Regret	2008		有り (20'29")	
85	Indrama	2008			有り (DVD)
86	Antromak	2009		有り (25'50")	
87	Rose-Marie Khmere	2009			有り (DVD) (脚本)
88	Mayerling Khmer	2009			有り (DVD) (脚本)
89	Mitrida	2009 or 2008?			有り (DVD) (脚本)
90	A man ... risen from dead	2009			有り (脚本)
91	Philemon et baucis khmers	2009			有り (DVD)
92	Phnom Penh 2009	2009			有り (DVD)

※情報はボバナセンターのデータベースから採録したものである。ボバナセンターのデータベースに記載が無かった作品についてはモナシユ大学図書館のデータベースから採録した。題名や製作年には不確かな点があり、特に製作年は参考文献によって異なることが多い。

※再生できる作品は画面上の文字情報から題名を写した。再生できない作品の題名は、ボバナセンター、もしくはモナシユ大学図書館のデータベースから写した。

※No.13と14は同一タイトルだが、分数が異なる。No.13は白黒だが、No.14はカラーであるため、別作品としてリスト化した。

### 3.2. ノロドム・シハヌーク作品の保存について

ノロドム・シハヌーク作品の著作権はモニニアット前王妃が相続しており、映画フィルムで撮影された作品はフランス国立映画センターが代理保管している。そのため、ノロドム・シハヌークの初期作品がすぐに失われることはないと考えられる。しかし、映画フィルム以外の保存では早急に対策すべき問題があるため、以下、三点を指摘したい。

一つ目は、モナシユ大学図書館が所蔵しているDVD-Rのほとんど全てが再生できないという問題である。さらに、ボバナセンターが所蔵しているノロドム・シハヌーク作品のいくつかのデジタルデータも、再生が途中でできなくなるものがある。デジタルデータは長期保存が可能で劣化しないという間違った認識が流布しているが、デジタルデータの複製時にデータが破損や圧縮されて失われたり、データを保存している媒体 (DVDディスク、ハード・ディスク・ドライブ

等) 自体の物理的、経年劣化により再生ができなくなることがある。

1980年代以降の彼の作品はビデオカメラで撮影したものが多く、そのためオリジナルがビデオテープやデジタルデータとなっている。彼の後期の作品のいくつかは、そうした理由から既に映像データが失われている可能性がある。誰かが保存してくれているだろうという安易な推測をしている限り、これからもカンボジアの映画作品はこのように失われ続けるだろう。

二つ目は、『プレアビヒア』(1966?) (Preah Vihear) について。モナシユ大学図書館には『プレアビヒア』のスチル写真が所蔵されている。モナシユ大学でノロドム・シハヌーク関連資料を調査・管理しているJulio A. Jeldres氏によれば、『プレアビヒア』の映画フィルムは1970年代のロン・ノル政権時代に破棄されたのではないかとのことであり、もしそうであれば、スチル写真のみが残存しているということになる。この作品

以外にも、映画は残っていないが脚本のみが残っている作品もある。そのような作品は、写真プリントや脚本を優先して保存処置した方がよいと思われる。特にプレアビヒア周辺は地理的に政治的な問題があり、今後何らかの廃棄が密に行われたとしても不思議ではない。

三つ目はボパナセンターが所蔵しているノロドム・シハヌーク作品コレクションについて。フランス国立映画センターとイウ・パナカーの2者から寄贈されたデジタルデータが主のコレクションであるが、イウ・パナカーから寄贈されたデータは後年になってビデオ編集された形跡がいくつかみられる。そのため、どこがノロドム・シハヌーク作品のオリジナルで、どこが改変部分か不透明な作品が多い。こういった改変は、ノロドム・シハヌーク作品の調査や研究を行う際、混乱の元になるだろう。関係者が存命の内にできるだけ早急な調査が必要である。

---

## おわりに

「アーカイブ」という言葉は日本でも最近よく聞く言葉であるが、「映画保存」という分野は日本の社会ではあまり知られていないように思われる。ましてや、カンボジアの映画保存となればなおさらである。そのような状況の中で、日本人として他国の映画保存にどのように関わることができるのか、また関わるべきなのかについての試行錯誤をそのまま書かせていただいた。カンボジアの映画はどのように失われていくのか、そしてどのように保存すべきなのか、本稿がその一端を知っていただく機会になれば幸いである。

---

## 参考文献

- Ly Daravuth and Ingrid Muan. 2001a. *Cultures of Independence: An introduction to Cambodian Arts and Culture in the 1950's and 1960's*: reyum.
- Ingrid Muan and Ly Daravuth. 2001b “CAMBODIA, A Survey of Film in Cambodia” in *Film in South East Asia: Views from the Region*, ed. David Hanan: SEAPAVAA [South East Asia-Pacific Audio Visual Archive Association], the Vietnam Film Institute and the National Screen and Sound Archive of Australia, (2001).

岡田知子 2012 『カンボジアを知るための62章』(第2版)明石書店、p.322-335。

岡田知子 2013 『カンボジア映画の現在』東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室。

鈴木伸和 2016a 「カンボジアの視聴覚資料保存(前編)」『映画テレビ技術(7月号)』、No.767。

鈴木伸和 2016b 「カンボジアの視聴覚資料保存(後編)」『映画テレビ技術(8月号)』、No.768。